

# あの図書館の彼女たち

The Paris Library

ジャネット・スケスリン・チャールズ著

東京創元社 2420円

評・森本 あんり (神学者  
東京女子大学長)

二年前にアメリカで出版されたこの小説が、今ウクライナで起こっていることをこんなにも身近に見せてくれるとは、読む前には想像もできなかった。自分の住む町が外国の軍隊に占領され、人々の暮らしが寸断され、愛情と友情、嫉妬と裏切りが思わぬ結末を導いてゆく。

おそらく、いちばん驚いているのは著者本人だろう。モンタナ州の小さな町で育ったアメリカ人だが、ウクライナのオデーサで二年間英語を教え、その後パリのアメリカ図書館で働いた。表題にある「あの図書館」である。著者はここで、第二次大戦中に働いた勇敢な女性司書たちの実話を聞き、綿密な調査をもとに本書を書き上げた。著者二冊目の佳作である。

なぜ図書館がそんなに大事なのか。それは、図書館こそ侵略者とその国の文化を破壊し抹消するために向かう場所だからである。ナチスは、パリのウクライナ図書館から収蔵品を没収し、

## 文化守る 司書の戦い



◇Janet Skeslien Charles＝米国の女性作家。2009年デビュー。ウクライナと米国で教職に就いた経験がある。

司書を逮捕した。文学や哲学の本を選びすぎて略奪した。ユダヤ系の本を禁止し、アメリカ人へミングウェイの本を取り除かせた。

司書たちは、決死の覚悟でユダヤ系蔵書を避けさせ、利用登録者に本を届ける。遠く戦場にある兵士たちに本を送る。兵士たちが、ワインでも食料でもなく祖国の本を渴望するからだ。そして、それを知ったナチスの占領当局は、捕虜となった兵士たちへの送本を禁止する。図書館は、文化存続をかけた戦争の最前線なのだ。占領下のパリには、ナチス専用の映画館や娯楽館があったという。将校の中にも、図書館を尊重する人はいた。ナチズムも、高度に洗練された文化の中に胚胎したのである。はたしてそれは、人間の文化の変わらぬ意義を示すのか、それともまったく無力と欺瞞を示すのか。

今われわれは、ナチスならぬロシアの軍隊がウクライナの文化施設を次々に破壊するのを見る。だが、本書の舞台となった図書館は、今も健在で開館中とのことである。高山祥子訳。